

建築志す社会人が集う 甲府工業高校



午後5時過ぎ、部活動に励む高校生の声でにぎわう山梨県立甲府工業高校の教室に、建築を志す生徒たちが集まってくる。甲府工高の社会人向け課程「専攻科建築科」は、国内で唯一の「公立・夜間・2年制」として運営されている。年齢や経歴に関係なく、仕事を続けながらリスキリング（学び直し）ができる場として地域の人材育成を支え、地元企業から厚い信頼を得ている。

専攻科建築科は1970年に設立された。建設分野の人材が不足していた当時、「働きながら建築を学べる学校をつくってほしい」という地元の要望にこたえて誕生した。2020年には建築士の受験資格要件が緩和され、修了と同時に1級、2級建築士の受験資格を得られるようになった。カリキュラムは座学から模型制作する実践授業まで幅広い。現在は1、2年生ともに18人ずつと少人数だが、建築を学びたいという強い思いを持って通学している。

2年間の集大成となるのが修了設計の制作と発表だ。本年度は6、7人でチームを組み、エリア全体の一体感も重視した模型制作する



甲府工業高校

夜間・2年制の社会人向け課程を運営

業界経験問わずリスキリング

生徒同士が意匠やコンセプトについて、時に衝突しながらも意見を交わすことで、粘り強さや精神力も養われる。来年2月の修了設計発表会には、業界関係者ら100人超が参加する予定だ。

業界未経験者でもリスキリングできる場として、甲府工高は地域で貴重な役割を果たしている。高校卒業後に建設業界へ入る若者や、自衛官から大工へ転身した人、60歳を間近に控えた社会人など、生徒の年齢層や経歴は幅広い。「中学レベルの数学も満足にできなかった」と振り返る長田和訓さん（2年生）は、仲間たちの支援を受けながら「構造力学」を一から学んだ。

建設業界で働きながら、さらなる技術向上を目指す生徒もいる。大工の石倉翔さん（2年生）は、けがをきっかけに「この仕事を一



制作は和気あいあいとした雰囲気です

生続けられるかは分からない。設計もできるようになりたい」と考え、入学を決めた。

専門は住宅建築だが、1年生の頃に、「建築史」の授業を受けたことで建築に対する見方が変わった。「遠くの美術館に出かけ、展示物ではなく建築物の構造を見る」ほど興味の高さが広がったという。自宅と会社、現場、そして学校を行き来する多忙な日々だが、仲間たちと充実した時間を過ごせていると笑顔で話す。

地元の建設業界との結び付きが強い甲府工高は毎年、複数の企業を招き、事業内容や特徴を紹介してもらっている。興味を持った生徒は夏休みなどを利用してインターシップに参加する。アルバイト



それぞれの得意を生かして、生徒も「先生」に

担い手不足解消へ橋渡し役に

トや契約社員を経て、正社員になる例も少なくない。企業側も甲府工高の理念を理解し、勤務時間を調整したり授業料を負担したりしている。

「将来的に建築家として独り立ちしたい」と話すウズブリー煌さん（2年生）は、学校に紹介してもらい設計事務所でアルバイトをしながら勉学に励む。「この学校を選んだからこそ今の自分がある」と、夢の実現に向けて奮闘している。

専攻科建築科の存在は生徒、企業、地域のいずれにもメリットがあると話すのは菅沼雄介教諭。夜間課程のため、生徒は仕事を辞める必要がない。建設業界で働きながら学べば、学校で学んだことを現場で実践する「効果的なサイクル」も構築できる。

年間約20万円の授業料も選ばれる理由の一つだ。建設会社は教育コストを低く抑えられるほか、技能や知識の習得を学校に任せられるというメリットがある。「企業がOJTを通じて建築とは何かを体系的に教えるのは難しい。それができるのは学校の強みだ」と菅沼教諭。民間の学校や予備校が少ない地域にとっても重要な学びの場となっている。

県の「建設産業担い手確保・育成産学官連携会議」は、甲府工高の学びを「担い手確保に生かす」方針だ。移住者が甲府工高で学び、県内の建設会社に定着すれば、担い手不足の解消につながる。

資格やスキルが求められる建設業界へ異業種から転職するのは容易ではない。甲府工高はその「橋渡し役」であり、「新規入職者を増やす間口モデル」（菅沼教諭）として、大きな可能性を秘めている。